

東アジア文化圏と村上春樹 ——越境する文学、危機の中の可能性——

2012年9月、尖閣諸島の国有化をきっかけに日中間の紛争が過熱したとき、村上春樹は自ら投稿し、「魂が行き来する道筋を塞いでしまってはならない」（『朝日新聞』9月28日付け）と述べて、読者の強い共感を呼んだ。そのとき彼の脳裏にあったのは、「音楽や文学や映画やテレビ番組が」「多くの数の人々の手に取られ、楽しまれている」東アジア共通の文化圏らしきものが生まれていること、そしてそれが危機に瀕しているということだった。村上の発言に中国の作家閻連科がすぐ「政治が不穏であるとき、いかなることがあろうと、まず文化と文学という世界各国の人々の心と血管と蔓を互いにつなげる根を絞め殺してはならない」（『AERA』10月15日号）と呼応した。彼もまた、国境を越えて読者・視聴者が作品を享受する“東アジア文化圏”のおぼろげな存在と、差し迫る危機を体感していたに違いない。

確かに、村上春樹の文学作品や、アニメ・マンガ、ライトノベル、ゲーム、そしてコスプレや二次創作などのサブカルチャーは、東アジアのみならず世界の若者を惹きつけている。ただ、その一方で、それらが本当に共通の文化となり得ているか疑う声もある。はたして東アジアに共通の文化圏は生まれているのだろうか。生まれているとすれば、それはどのような性質のものなのか。背後で、東アジアの文化にどんな変化が起こっているのか。

国境を越え、領域を越えて作品が享受される時代ゆえに、文学や文化の持つ可能性が問われている。日中韓の間で緊張が高まり、「魂が行き来する道筋」の存続が危ぶまれる今、それらが果たす役割はあるのだろうか。わたしたちに突きつけられた問題は決して小さくない。

危機の中、国境を越えて世界的に享受され、アニメ・マンガ世代の若者にも支持されてきた村上春樹は、東アジアの文化とその変容を考える格好の手がかりだろう。そんな思いから、村上春樹をいとぐちに、“東アジア文化圏”について知の交流を試みることにした。結集するのは、日本、中国、韓国、アメリカの同じ関心を共有する文学者たちである。それぞれの視座からの報告と相互の討論を通じて、文学や文化が東アジアのそれぞれの地域でどのような様相を見せているのか、東アジア共通の文化圏は可能なのか、そして未来に向けてどのような展望があり得るのか、踏み込んだ考察を試みたい。